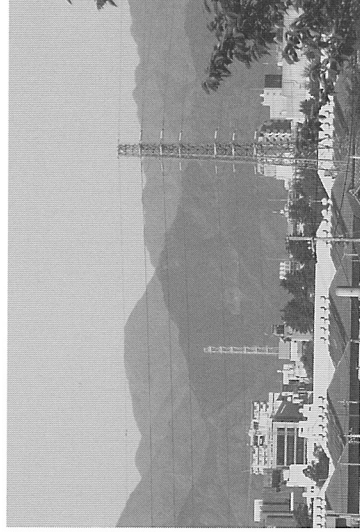


## 山が透明に見える錯視

### 北岡明佳



透明に見える山。高島氏提供。

錯視は人工物によく見られ、自然物に錯視が見られる例は少ないが、注意深く観察すると、普通の景色に錯視が見られることもある。

上の写真がその例で、山が透明に見える錯視である。これは、日本大学研究員の高島翠氏が今年の四月に撮影したもので、東京都町田市内の小山馬場谷戸公園付近から西の方角の景色とのことである。確かに山が透明に見える。

高圧線さえなければもつとよかつたであらうが、撮影ポイントとしてはその位置しかなかつたと思われる。なぜなら、この種の透明視が発生するには、二つのエッジ（エッジとは明るさや色の領域の境界のこと）がなめらかに交差する「X接合部」が必要だからである。少しでも撮影位置を変えると、稜線のエッジがずれて、X接合部が消失してしまう。

この種の透明視は、画義的透明視 (Eistable transparency) と呼ばれ、この山の写真で言えば、左上から右下への「透明な」稜線が右上から左下への稜線の手前に見える場合と、後者が透明に見えて前者の手前に見える場合があり、これら二つの見え方が反転する。画義的透明視の条件は、X接合部を超えて、エッジのコントラスト極性（どちら側が明るいかということ）がどちらのエッジについても変わらないことである。

なお、「透明に見える山」の報告はこれが初めてではなく、池田（一九九三）（関西大学『社会学部紀要』第二五巻第一号、一六五—一六八頁）によると、大阪府吹田市の一角から遠望した山に見えるとして、写真が載っている。その論文によると、同様な写真が、一九五三年のドイツ語の書籍に載っている。

（きたおか あきよし 知覚心理学）